

# アメリカン・ゴシック論

— アメリカン・ゴシック指標という試み —

American Gothic — With an Index of American Gothic

子 安 恵 子

Keiko KOYASU

## はじめに

学生たちの本離れが嘆かれるようになってどのくらいたつだろう。確かに、読むべき年齢で読むべき本を読んでいない学生は多い。そういった学生は、初期の段階で読むという基本や骨組みが形成されていないため、骨組みに肉付けをしていくこと、基本となる木から枝をのぼし葉を茂らしていくことが、難しい。

学生たちに本を読ませることは簡単である。ブック・レポートの提出を課せばよい。けれども本を読む楽しさを教えようとなると、そんなに容易ではない。ましてや、子供の頃に読む物語を読んでいないという理由で、大学生になってから子供の本を読ませることは、本を読む楽しさを教えるどころか、本離れを助長してしまうかもしれない。そこで、ある指標を作ってその度数を測る、ゲーム感覚での本の読み方を試みた。

自身アメリカ文学、19世紀の小説を専門とするため、まず講義科目「米文学史」、半期14週間、学生数81名でその試みを予定した。文学史という表面上にとどまらず、アメリカ文学を代表する本を1冊でも多く読ませ、なおかつ本を読む楽しさを味わわせよう、とい

うせっかちで欲張りなものである。ところが、『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876)を読んだことがある学生が81名中2名、題名を耳にしたことがある学生が8名、あとの学生は粗筋はおろか題名すら聞いたことがないという現実に直面した。そこで対象を広げて、「リーディング」の3つの授業でも少し試みることにした。対象4グループは、メインとなるAグループ81名(文化専攻)、他にBグループ52名(英文専攻)、Cグループ39名(国際社会専攻)、Dグループ41名(工学専攻)の合計213名で、各グループ大学は異なる。

この試みの動機と解説として、本論では3つのことを論じていく。まず第1に、アメリカ文学とは何かを踏まえた上で、第2にアメリカン・ゴシックの定義の問題へと進む。第3に、アメリカン・ゴシックの典型であるポオ(Edgar Allan Poe, 1809-49)から2作品を取り上げて論じる。以上、アメリカン・ゴシック論を展開しつつ、アメリカン・ゴシック指標をもとにその度数を測るという読み方が、学生たちにどう捉えられ、本を読むことへの姿勢にどう影響を与えるかを見ていく。

I

アメリカにおけるゴシック文学というジャンルを再認識する動きがある。辞書にも、ゴシック文学を「小説の1ジャンルとして考える傾向が強い」(世界大百科辞典)とある。しかしその動きは、ゴシックを小説の1ジャンルとしてみなすのではなく、「アメリカ文学の作品はすべてゴシック文学である」と主張する。だが「アメリカ文学=ゴシック文学」というのではなく、「アメリカ文学=アメリカン・ゴシック」というものである。

「アメリカ文学=アメリカン・ゴシック」であるという主張の代表者として4人を紹介したい。

... from Charles Brockden Brown to William Faulkner, or Eudora Welty, Paul Bowles or John Hawkes, it is ... a gothic fiction. (Fiedler 29, 1966)

アメリカ文学の大まかな系譜…この系譜について特徴的なことは、それがそのままゴシズムの系譜になることである。(八木 2, 1992)

From the earliest period of American Gothicism – and some critics have seen almost the whole of American writings as a Gothic literature ... (Lloyd-Smith 4, 2004)

アメリカという名の近代国家の実験場は、その起源より、いつもアメリカン・ゴシックという名の想像力の実験場であった。(巽 1, 2005)

年代順にあげたが、最初のフィードラー (Leslie A. Fiedler) の考えは、アメリカン・ゴシックというものを主張する際、上記3人を含め常に基底に流れていく。

本論では、「アメリカ文学=アメリカン・ゴシック」という考え方は今や決してマイナーなものでないことを踏まえた上で、まず第1

の問題、「アメリカ文学とは何か」という定義の問題に入る。

アメリカ文学史のテキストは数多く出版されているが、アメリカ文学とは何かという定義づけが述べられているものは稀である。その稀な1冊にはこう記される。「アメリカ文学とは、アメリカ国籍を持ったものが、英語(アメリカ語)で書いた文学作品のことである。」(研究社 3) 実に単純明快である。当たり前と思われる定義かもしれないが、この当たり前のことが基本であり重要である。すなわち、アメリカ国籍を持つという第1条件、そして英語で書くという第2条件、この2つの条件を必ず当てはめるとなると、土着の民間伝承は取り上げられず、アメリカ文学は一握りの白人がアメリカ大陸に上陸した17世紀初頭から始まる。しかし上陸から独立までには150年以上ある上、その間はまだアメリカという独立国家でないため、植民地時代のもものは必然的にアメリカ国籍を持つという第1条件を満たさないことになる。アメリカという新たな背景から新たに生まれたものをアメリカ文学の作品とみなすのが一般的ではあるが、本論はあくまでもこの2つの条件を満たしているもののみをアメリカ文学の作品とみなす。

次に、アメリカ文学の特質とは何かを問われたなら、その答えもまた明快、「若さ」である。独立から数えれば230年余である。すなわち、アメリカ文学は民族的な伝承や詩歌から始まるのではなく、いきなり散文から始まる。とはいえアメリカ文学には散文のみで韻文が存在しなかったわけではない。けれどもアメリカ文学の中における詩は、イギリスの詩を真似たものから始まり、19世紀中葉から、ホイットマン (Walt Whitman) に代表されるように、アメリカ的な詩の伝統を作り上げようという動きに他ならず、またその

語り口は散文調である。

すなわちアメリカ文学の作品は散文小説であると言える。あるいはヨーロッパの批評家たちが使う「アメリカ小説」という語を用いる方がよいかもしれない。小説という語を用いるとなると、“novel”か“romance”かという問題が生じてこよう。そもそもアメリカ小説というものとは存在するのだろうか。フィードラーは指摘する、「『アメリカ小説』なるものは存在せず、ヨーロッパ型小説の地方的変種、アメリカ型感傷小説、アメリカ型ゴシック小説、アメリカ型ロマンス等があるのみである。アメリカで創造されたサブ・ジャンルすらただの1つも見当たらない。」(Fiedler 24)

けれどもフィードラーがあげた各型の小説こそアメリカ小説とみなせるのではないか。すなわちブラウンからピンチオン(Thomas Pynchon)まで、現実に起こりそうなことがもっともらしく描かれる“novel”が小説のメジャーでなく、異常でグロテスク、現実にはありえないようなことが普通に描かれる“romance”がアメリカではメジャーであると言える。アメリカ文学＝アメリカ小説、そしてその小説とは“romance”なのである。これこそがアメリカ小説、すなわちアメリカ文学であると言えよう。

## II

第2の問題にはいる。「アメリカン・ゴシックとは何か」という定義の問題である。

まず“Gothic”という語を語源的に見てみると、ゴシックとは元来ゴート人(Goth)を意味する語である。スカンジナビアから移動してきた東ゲルマン民族であるゴート族(the Goths)は、ローマ帝国を侵略した。そのため“Goth”という語自体、ゴート人の未洗練な流儀に対する蔑称の語調をもつ。ゴ

シックは、始めは特定の教会建築様式を指すものであった。ルネサンス時代の美術批評家が、ゴシック様式をゴート族のように粗野で不快なデザインとみなしたことに始まる。この語は、教会建築だけでなく、後に美術様式全般に拡張して用いられるようになった。さらに、単に美術ばかりか文学・音楽・思想など、多様な文化領域においても「ゴシック的」な概念の使用が提唱され、精神史的文脈における定義と説明とが求められるようになった。

いわゆるゴシック文学、すなわちゴシック・ロマンスというものは18世紀後半、小説(novel)のサブ・ジャンルとしてイギリスに起こった。歴史的にはリチャードソン(Samuel Richardson)の『パミラ』(*Pamela*, 1740)と『クラリッサ』(*Clarissa*, 1747-48)から始まる。迫害される女性の物語の特質を受け継ぎながら、怪奇小説、推理小説などの発生をうながし、その発展に寄与したのである。ゴシック・ロマンスとは、主として中世の古城、ゴシック風の建物を背景として超自然的な怪奇を扱い、恐怖感を売り物とする小説で、その最初の実践者はウォルポール(Horace Walpole)である。ウォルポールは1764年に『オトラント城奇譚』(*The Castle of Otranto*)を発表した。この作品の中には、ゴシックの主要な要素と主題がすべて見出される。すなわち、中世の古城、ゴシック風の建物や地下の部屋などを背景として超自然的な怪奇を要素として持ち、悪役の主人公による誘惑と苦悩、悪に隷属した状態のもつ美と恐怖を主題としている。

ゴシック・ロマンスは『オトラント城奇譚』に始まり、『ヴァセック』(William Beckford, *Vathek*, 1786)などを経て、『ユドルフォアの謎』(Ann Radcliff, *The Mysteries of Udolpho*, 1794)、『マンク』(Matthew Gregory Lewis, *The Monk*, 1796)、『ケイ

レブ・ウィリアムズ』(William Godwin, *Caleb Williams*, 1794), 『フランケンシュタイン』(Mary Shelley, *Frankenstein*, 1818)を生み出していく。けれどもイギリスではこのゴシック・ロマンスは小説のサブ・ジャンルにとどまり、イギリス文学史の系譜においてあくまで反主流であった。

上述の系譜をアメリカ小説につなげてみると、イギリスのゴシック・ロマンスの中でも変り種とされる『ケイレブ・ウィリアムズ』あたりで、ブラウンの『ウィーランド』(*Wieland*, 1798)とうまくつながる。どうつながるかを一言で言うと、『ケイレブ・ウィリアムズ』は追う者と追われる者の逆転劇でもあり、「変身」の物語でもあるので、この点において『ウィーランド』とつながるのである。

さて、「アメリカ文学とはアメリカ国籍を持ったものが、英語で書いた文学作品」という2つの条件を厳守すると、ブラウン以前のアメリカには文学作品らしいもの、小説らしい小説は事実上なかったと言えよう。すなわちアメリカ小説はブラウンに始まり、それ以降クーパー (James Fenimore Cooper) の『最後のモヒカン族』(*The Last of the Mohicans*, 1826)、ポオの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』(*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*, 1838)、ホーソーンの『七破風の屋敷』(*The House of the Seven Gables*, 1851)、メルヴィルの『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)、マーク・トウェイン (Mark Twain) の『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884)、ジェームス (Henry James) の『ねじの回転』(*The Turn of the Screw*, 1898)、フォークナー (William Faulkner) の『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*, 1936)、バース (John Barth)

の『山羊少年ジャイルズ』(*Giles Great-Boy*, 1966)、ピンチョンの『V.』(V. 1963)などにつながっていく。

上述の作品をみてみると、アメリカ小説の系譜はゴシック・ロマンスの系譜であると言え換えられるかもしれない。イギリスにおいてサブ・ジャンル、反主流であったゴシック・ロマンスは大西洋を渡ると、アメリカ小説の本流へとつながり、繁栄していった。ここで、「アメリカ文学=アメリカ小説 (romance)」の式にもう1つ「=ゴシック・ロマンス」を付け足す図式が出来上がったわけだが、3番目の項目ゴシック・ロマンスは、単なるゴシック小説ではなく、アメリカン・ゴシックであることを論じていきたい。

アメリカン・ゴシックは、背景となる中世の城、修道院、宗教裁判、牢獄などのゴシック的道具立て、その推理小説的な筋の展開、さらに人物の内面的分裂を分身の形で示す手法、これら3つにおいて新しい特質を付け加えている。特に分身の手法では、アメリカン・ゴシックは人間の非合理的な内面、心の中の地下風景を探求している。ヨーロッパの城塞建築から着想されているゴシック・ロマンスが、古城はおろか歴史ある建造物など存在しないアメリカ大陸で、同様な背景など求められるはずもない。けれども城や修道院の回廊・地下の部屋を、文明から隔絶された人里離れた屋敷や荒野へと、またイタリアの山々にはびこる捕囚を、アメリカン・インディアンによる捕囚や暗くうっそうと生い茂った大きな森へと置き換えることは、決して困難ではなかったであろう。アメリカン・ゴシックにおいては、幽霊の出る城や地下牢の代わりに、幽霊の出る森や洞窟、人間が逃げ出そうと苦闘している天然の落とし穴や奈落の底を使う。そして救いなき荒野や自然が悪の象徴になる。アメリカン・インディアンや有色人種は邪悪

の権化とみなされるのである。

イギリスのゴシック・ロマンスが大西洋を渡ってアメリカ小説となった。アメリカでの小説とは異常でグロテスク、現実にはありえないようなことが普通に描かれる“romance”である。そしてその系譜はブラウンからピンチョンまで、言い換えれば、ゴシック小説を書いたアメリカ小説の父から、現代の科学技術における恐怖を描くポスト・モダニズムの代表作家まで、というわけである。ここに「アメリカ文学＝アメリカ小説＝アメリカン・ゴシック」といった図式は完成をみる。

### Ⅲ

「アメリカ文学＝アメリカン・ゴシック」の事例をポオに求めたい。彼の作品はすでにゴシックというレッテルが貼られている。だが、従来の考え方や分類に基づいて書かれている、アメリカ文学史のテキストにおけるポオの扱い方はどうであろう。その扱いを2例見てみたい。いずれもポオの項目における書き出しの部分である。

いかにも非現実的で怪奇趣味の色彩濃い作風で知られるポオは、愛国主義的な意識が文学者の間にも強かった19世紀中期にあって異彩を放つ存在である。時間的にも空間的にも、少なくとも表面的には全くアメリカとはかかわりが無い架空の世界を構築し、それを自分の文学の舞台とした。(英宝社 41-42)

ニュー・イングランドの作家群が、たとえその世界観、人間観の違いこそあれ、ロマン主義の波をかぶった巨大な精神主義にひたり、アメリカ文学の独立へと筆をはしらせていた頃、時代のこうした風潮・要求には関心が無いがごとく、ひたすら唯美的な芸術至上主義の文学への模索をかさねていた者がいた。(創元社

66)

1つ目の例は「その他の詩人たち」の項目に文類された中での紹介である。また2つ目の例では、上述の紹介に始まり、数行後に「アメリカ文学の中にあっても1つの別格」とまで表現されている。もちろん尊敬の意味合いはもち合わせない。アメリカ文学史のテキストにおけるポオの扱いは、文学史という流れにあって空中楼阁的な存在に扱われている。このように脇に追いやられたポオであるが、アメリカの文学作品はすべてゴシックであるというアメリカン・ゴシックの流れの中では、当然ながらブラウン、ホーソーン、メルヴィルと並んで基軸の1つに据えられよう。

それではポオの作品の従来の読み方と、アメリカン・ゴシックとしての読み方とでは違いがあるのか、あるいはどう違うのか。文学史に列挙される純文学といわれる作品は、人生の不条理を語るものでなくてはならなかった。ところがポオ作品はどこか幼稚で、人生の不条理を語るものには程遠いとフィードラーは言う。

This is part of what we mean when we talk about the incapacity of the American novelist to develop; in a compulsive way he returns to a limited world of experience, usually associated with his childhood, writing the same book over and over again until he lapses into silence or self-parody. (Fiedler 24)

まさにポオその人を的確に表現した批評である。ところがこれはポオについて語られたものではなく、アメリカ小説について述べられた箇所なのである。アメリカ小説及び作家への批評がポオへの批評そのものとなっているということは、ポオの作品が典型的なアメリカ小説であるということ、いかにアメリ

カ的であるかということ立証するものであろう。従来からポオの作品はゴシックであるとみなされているが、加えて幼稚こそがアメリカ小説がもつ特質であり、性の存在に乏しく成熟した女性が存在しない等の特質をもち合わせるポオの作品こそ、アメリカン・ゴシックと呼ばれるのに相応しいといえる。

そこで大胆な試みであるが、アメリカン・ゴシック指標なるものを提案し、各作品のゴシック度というものを数値化してみたい。lundblad (Jane Lundblad) は *Nathaniel Hawthorne and European Literary Tradition* で、ゴシック小説の特色的要素を12項目列挙し説明している。これを参考に、一部手直しや解釈を加えてアメリカン・ゴシック指標とし、ここに記したい。

【1】「文書」すなわち二度語りであり物語内物語のことである。古文書、手記、証文などの文書がこれに相当する。【2】「孤立した場所・空間」ゴシック小説では城とされている。秘密の部屋、回廊、迷宮のような地下道をもつ城や地下墓所をもつ修道院の場合もあり、アメリカン・ゴシックではこれに天然の洞窟、砦、船などが加えられる。【3】「犯罪」家督相続をめぐる殺人だけでなく、近親相姦的な愛や嗜虐的な拷問を含む犯罪。

【4】「宗教」【5】「悪党」本来ゴシック小説ではイタリア人、時にスペイン人となっているが、アメリカン・ゴシックではアメリカン・インディアンや黒人に置き換えられる。

【6】「不具」悪党はしばしば不具に仕立てられている。【7】「幽霊」ゴシックの城や屋敷には本物またはにせの幽霊が充満している。【8】「魔術」【9】「自然」恐怖をそそるものとしての嵐、雷、霧、闇など。蒼い月光におぼろにかすむ夜景も入る。【10】「鎧をつけた騎士など」【11】「芸術作品」肖像画などである。その肖像画は人物が動いたり

生命を宿していたり、またキャンバスから出てきたりもする。【12】「血」体液としての血と、家系や血筋を意味する血の両義を含む。以上、12項目を使ってアメリカン・ゴシック指標として使っていきたい。

この指標を物差しとしてポオの作品をみていく。彼の作品への評価や解釈は今日ほぼ定まったものとなっているが、アメリカ文学はすべてアメリカン・ゴシックであるという見解の下では、当然ポオの全作品がアメリカン・ゴシックとなる。そこで、従来ゴシック小説とはみなされてこなかった『アーサー・ゴードン・ピムの物語』と『ユレイカ』(Eureka, 1848)を取りあげ、そのアメリカン・ゴシック度を測定していきたい。

『アーサー・ゴードン・ピムの物語』はポオ唯一の長編小説である。これは冒険談、海洋小説とみなされ、ポオ自身、海洋物は一般大衆に受ける素材であると確信していることを *Wyandotté* 書評で述べている。<sup>1)</sup> だがこの作品は、一見南海への先駆的な探検を描いた海洋物だが、実際は異質な題材からなる合成物である。悲劇・神話・風刺・旅行記・冒険談・海洋小説・心理小説・推理小説・象徴主義文学など、テキストの均質性や視点の統一には全くかけている。しかしこの作品をゴシック・ロマンスの中においてみるとどうであろう。ゴシック・ロマンスのように中世が舞台ではない。フロンティア・ラインが消滅しつつあった当時、開拓すべき未知の世界、驚異の地は南氷洋、南極大陸であった。この作品は、舞台をゴシック・ロマンスの中世から南極へと移し、アメリカン・ゴシックとなっていく。

この作品は「序文」から始まり、「ノート」と題された付記で終わる。序文はピム自身が書いたもので、本文始めの方の数章は編集者であるポオが担当し、残りはすべてピムが書

き上げ、そして最後のノートは再び編集者ポオが書いている。なぜこのような構成になったのかということ、ピム本人が提供した事実に基づいて編集者ポオがまとめ上げて雑誌に発表したのだが、あまりにも異常な体験のため事実であると受け取ってもらえなかった。そこでピム本人が書くことになったといういきさつである。そして最後の数章はピムの自殺により紛失されてしまい、編集者ポオがノートにその旨を記すにいたる。このわかりづらい構成は作家ポオが意図したものであり、この点がゴシックである。わざわざややこしくし、事実の信憑性さえもあいまいにしてしまうことは、ゴシック小説の序文や断り書きが担ってきた役割である。序文やあとがきが本文を複雑にするだけでなく、物語本体と構造的にからみあう仕組みはゴシック小説の特質の1つである。ここにアメリカン・ゴシック指標の【1】「文書」がみられる。

少年ピムは捕鯨船に乗ることを親に反対されたため、船長の息子オーガスタスと共謀し、船倉に隠れて強引に乗船する。ところが1週間以上たってもオーガスタスは連れ出しに来てくれず、船倉から出ることもできない上に、なぜか出口もふさがれている。この間ピムは船倉で、飢えと乾き、闇、悪夢、野獣、雷鳴など、ゴシック小説の要素を次々と経験する。船倉から出られないのは、出航から4日目に反乱が起こっていたからであり、そのことを血で書かれた伝言文で知る。物語の冒頭部、全25章中第2章までで、すでにアメリカン・ゴシックの指標【2】「孤立した場所」(船)、【9】「自然」(雷、闇)、【12】「血」がみられる。

反乱の首謀者は一等航海士で、手下は黒人のコックをはじめ数人の船員であった。一等航海士は黒人のコックに命じて、反乱に加わらなかった者たちの首を斧で次々とはねさせ

る。指標の【3】「犯罪」、【5】「悪党」、【12】「血」である。

オーガスタスは監禁されているが、反乱者の1人であるピーターズが食事を運んできてくれている。このピーターズだが、アメリカン・インディアンと白人の混血で、背は140cmぐらいしかなく、そのわりに手足は巨大で妙な具合に曲がり、頭も異常に大きい1種の畸形である。アメリカン・ゴシック指標の【6】「不具」である。

さて、すでに反乱組の仲間割れが始まっていて、ピーターズはオーガスタスとピムを仲間に引き入れ、優勢になろうと企てる。3人の計画は、毒殺されて異様な姿になった船員の死体の扮装をして手下たちを驚かせ、そのすきに逆転を狙うというものである。一等航海士は迷信深い男であったため、その幽霊を一目見ただけで、驚愕のあまり息をひきとる。それに乗じて手下たちを皆殺しにし、再反乱は成功する。アメリカン・ゴシック指標の【4】「宗教」、【7】「幽霊」、【12】「血」が存在する。

ピム、オーガスタス、ピーターズそして新たに加わったパーカーの4人だけの航海が始まるが、大時化にあってマストは折れ、浸水し、沈没寸前の難破船となって海を漂う。指標の【9】「自然」(嵐)である。4人は飢えと乾きに苦しめぬく。4人の飢えは極限に達し、くじ引きによって1人が3人の食料となる。指標【3】「犯罪」である。

その後オーガスタスは壊疽で死に、ピムとピーターズはイギリスの船に救助される。この船は南極へ向かうが、なぜか南へ向かうほどに暖かくなり、黒ずくめの島に到着する。歯までも黒い住民やあほう鳥さえも黒く、黒い色しか存在しない島である。住民に歓迎された白人の乗組員たちだが、形勢が一転して溪谷で生き埋めにされてしまう。だがピムと

ピーターズの2人だけは「不思議な洞窟」(第23章)に迷い込んだあげく、命からがら島からカヌーで脱出する。アメリカン・ゴシック指標の【2】「孤立した場所」(溪谷, 洞窟), 【5】「悪党」である。

南極の海をカヌーで進むピムとピーターズは、今度は黒い世界から白い世界へと入っていく。海の水は南へ進むほど温かくなり、その水の色は乳白色、そこから立ち上る水蒸気は白っぽい灰色、空から降るのは白い粉、そして最後には白い大瀑布が待ち受ける。その大瀑布の裂け目のところに、真白な肌をし経帷子を着た巨大な人間のようなものが立ちだかる。指標【7】「幽霊」, 【9】「自然」(瀑布)が見られるが、最後の場面、白い経帷子を着た人間の姿に似た明るい瀑布は、指標の【11】「芸術作品」もあてはまる。すなわち、実際にこういった状況・現象は現実にはありえず、ピクチュアレスクな風景、ロマン派絵画となっているからである。

以上のようにみえてくると、この作品のアメリカン・ゴシック指標は【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【9】【11】【12】が存在する。12項目中10項目を有するため、アメリカン・ゴシック度10度と測定され、きわめてアメリカン・ゴシック性が高い作品と言える。

次に『ユリイカ』を検討したい。『ユリイカ』は副題で「散文詩」となっていて、さらに「物質的ならびに精神的宇宙についての論文」(*Eureka*, 185)と始めに記される。確固とした観測結果に基づく科学的宇宙論ではないからである。そのことはまた序で、「この作品を、ただ1個の芸術作品として、1篇の詩として贈る。」(183)とあることから判断できる。本文の冒頭で目的と命題が明確に述べられた後、本論に入る前に、ある手紙の中からの抜粋がかなりの頁を割いて記される。

これはゴシック小説での語りの特質の1つ、アメリカン・ゴシック指標【1】「文書」で、この仕掛けに不可欠な手紙・手記である。また指標【11】「芸術作品」もみられる。

この書では、天文学者ケプラー(Johannes Kepler)の惑星の公転軌道に関する法則、理性の時代の最初の人ニュートン(Isaac Newton)の重力と運動の法則、数学者ラプラス(Pierre Simon Laplace)の星雲説や天体力学から、帰納にも演繹にもよらず、「直覚」(206)のみに頼って「神のプロット」(292)であるところの「宇宙のプロット」を解明していく。天文学者を占星術師に、理性の時代の第一人者を最後の魔術師へと読み替えても、アメリカン・ゴシック指標の【4】「宗教」, 【8】「魔術」, 【9】「自然」は明白にみえる。

ポオの語る精神的宇宙とは、神の意図によって「無」(206)から「有」になり再び「無」へと帰る、あるいは復帰する過程のことである。物質的宇宙とは、「時の闇」(313)の中に存在していた「単一」(207)が拡散して「多」(207)になる。これが現在の状態で、やがて再び原始の「単一状態」(185)に復帰する過程である。すなわち闇から生まれ闇へと帰るというわけである。今日の宇宙に関する説は、いわゆるビッグバン、大爆発説であり、現在でも宇宙は拡大し続けているという膨張宇宙説である。ところがポオの宇宙は「神の意思によって虚無から生まれ」(205-6)、「無」から「有」へ、「単一」から「多」へと拡散するが、ある点に達すると拡散は一転して収縮へと転じ、またもとの「無」, 「単一」へと帰る収縮宇宙説である。すなわち基本的に闇があり、闇から生まれ再び闇へと帰る。ポオの宇宙のセッティングは闇であり、閉塞空間なのである。これはアメリカン・ゴシック指標の【2】「孤立した空間」(閉塞空間)



であり【9】「自然」(闇)でもある。

以上『ユリイカ』のアメリカン・ゴシック指標は【1】【2】【4】【8】【9】【11】と12項目中6項目で、アメリカン・ゴシック度6度、ゴシック性はあまり高くない。それにもかかわらずアメリカン・ゴシックとして論じるのにこの作品を取り上げたのは、この作品がサイエンス・フィクション、SFだからである。そしてSF自体、アメリカン・ゴシックに組み込まれるものであることを指摘したい。

ビーバー (Harold Beaver) はペンギン叢書『ポーのSF』(*The Science Fiction of Edgar Allan Poe*, 1976)の序で、「SF自体がゴシシズムの産物であり、未来と未来をもたらすであろう科学の恐怖を喚起することを意図している。」(xv)と述べている。またオールディス (Brian Aldiss) は『10億年の宴』(*Billion Year Spree*, 1973)の中で、「SFは、進歩しているが混乱している知識の中で通用しうる、宇宙における人間のあり方についての定義を探求するものであり、ゴシックあるいはポスト・ゴシック小説の型を特徴的に受け継いでいる。」と言う。ここでは、科学は「進歩しているが混乱している知識」の状態であると規定された上で、SFはそういった状態で通用する「宇宙における人間及びその地位に関する定義を探究するもの」と定義され、SFはゴシック・ロマンスに組み込まれる。

しかし果たして散文詩『ユリイカ』をSFに入れてもよいのかに関しては、次の指摘がある。世界初のSF専門誌 *Amazing* の創刊号(1926年4月)<sup>2)</sup>に、SFとは「エドガー・アラン・ポーのようなタイプの話——科学的事実と予言的ヴィジョンが混じり合った魅惑的な話」を指すものと述べられている。この指摘は、『ポーのSF』に納められている15の短

編のどれよりも『ユリイカ』についてのものとなっていよう。だが事実に乏しく、えせ科学宇宙論のような『ユリイカ』をSFとみなしてよいのだろうかという疑問は拭いきれていない。けれどもSFとは辞書に「科学、技術の思考や発想をもとにし、あるいはそれを装った空想的小説のこと」(広辞苑)とあるように、えせ科学者が科学的な装いを用いて書いたものなのである。その上厳密に言えば、ケプラーもニュートンもラプラスも今日的な意味での科学者ではなかった。なぜなら、「科学者」(scientist)という語は、イギリスの自然哲学者ヒューエル (William Whewell) が初めて使った語であり、それは1840年である。<sup>3)</sup> すなわちケプラー、ニュートン、ラプラスの3人は、魔術、神学、理学、美学、哲学などがすべて共存していた時代の人たちであり、いわゆる自然哲学者であったといえる。そうなると、ポーは宇宙の「その本質、その起源、その創造、その現在の状態、その命数について」(185) 語る資格が十分あったわけである。アメリカン・ゴシック度6度と算定された『ユリイカ』にプラスSF度が加えられることになり、『ユリイカ』のアメリカン・ゴシック性を高めるのには十分であろう。

アメリカ文学とは、イギリス小説の日陰者であり反主流であったゴシック・ロマンスがアメリカの本流につながったアメリカ小説 (romance) であり、それは異常でグロテスク、現実と超現実とが混在するアメリカン・ゴシックであるとの見解のもと、ポーの2作品『アーサー・ゴードン・ピムの物語』と『ユリイカ』を考察してきた。あえて脇にだけられた存在のポーを取り上げ、彼の作品の中でもゴシック性が少ないとみなされている2作品をとりあげたのは、ポーがアメリカン・ゴシックの中では支流ではなく本流であり、

ゴシック性が見出されなかった『アーサー・ゴードン・ピムの物語』と『ユレイカ』でさえもアメリカン・ゴシックであることを検証するためであった。

イギリスでのゴシック・ロマンスは、主人公はたいていの場合悪党であり、個人の情熱や意思、及び因習、権威、伝統などの周囲からの圧力や統制との衝突あるいは突破を目指している。原罪意識の存在はあまり見受けられない。アメリカン・ゴシックでは、人間個人の領域を「外」より「内」に求めて追求し、その恐怖は肉体的・社会的恐怖というより心理的・宗教的である。空想と現実、事実と幻想、神と悪魔、神と人間などの諸領域を混同し、交錯させている。すなわち、光と闇との交錯、共存こそが、ブラウンを始めとするアメリカン・ゴシックの特質の1つといえる。「ブラウンは光こそが彼の想像力の源泉だった。皮肉なことに、結果は影を一層濃くすることになった。」(Levin, 29)と述べられるように、<sup>4)</sup>ブラウンからピンチョンにいたるまで皆、闇の力、ゴシック的想像力を展開している。したがってアメリカン・ゴシックはアメリカ文学史の中での特殊なサブ・ジャンルではなくSFなどすべてを包括し、アメリカ文学そのものと言えるのではないだろうか。

#### IV

12項目のアメリカン・ゴシック指標をもとにその度数を測るというのは、文学的読みという観点からすると、文学作品の鑑賞への冒険だとも非難されよう。それでは学生たちの反応はどうだろう。

学生213名にポオの短編小説を読ませたアンケート結果は以下の通りである。( )内の%は各グループでの百分率である。

質問1：本を読むことは好きですか

グループ (専攻)	学生数	A 81名 (文化)	B 52名 (英文)	C 39名 (国際社会)	D 41名 (工学)
好き		12(15%)	12(23%)	2(5%)	12(29%)
どちらかという好き		15(18%)	10(19%)	4(10%)	10(24%)
どちらでもない		8(10%)	11(21%)	5(13%)	7(17%)
どちらかという嫌い		25(31%)	8(16%)	12(31%)	8(20%)
嫌い		21(26%)	11(21%)	16(41%)	4(10%)

この結果を見ると、やはり本を読むのが嫌いな学生は多い。また、文系(A, B, C)より工学系(D)の学生の方が本を読むことを好きな学生が多い点は大変興味深い。

質問2：度数を測る読み方をどう思いますか

グループ (専攻)	学生数	A 81名 (文化)	B 52名 (英文)	C 39名 (国際社会)	D 41名 (工学)
好き		18(22%)	4(8%)	14(36%)	14(34%)
どちらかという好き		26(32%)	10(19%)	16(41%)	19(46%)
どちらでもない		25(31%)	22(42%)	5(13%)	8(20%)
どちらかという嫌い		7(9%)	11(21%)	4(10%)	0(0%)
嫌い		5(6%)	5(10%)	0(0%)	0(0%)

読書嫌いの数字が目に見えて減り、本を読まない学生には気に入られたようだが、反対に本を読むのが好きな学生にはあまり好評でないとも言える。

質問3：こういった読み方をすることで、本を読むことが好きになりましたか

グループ (専攻)	学生数	A 81名 (文化)	B 52名 (英文)	C 39名 (国際社会)	D 41名 (工学)
好きになった		13(16%)	2(4%)	11(28%)	3(7%)
どちらかという好きになった		21(26%)	12(23%)	13(33%)	2(5%)
どちらでもない		45(56%)	34(65%)	11(28%)	34(83%)
どちらかという嫌いになった		2(2%)	4(8%)	3(8%)	2(5%)
嫌いになった		0(0%)	0(0%)	1(3%)	0(0%)

本が好きな学生には別段何の影響も与えないようである。この一試みだけから結論づけることはできないが、本嫌いの学生には読書

に興味を持たせることができた様子が十分見てとれる。

文学を専門とする者にとって、数値化という感情を無視したような読み方には憤りさえおぼえるかもしれない。だが、こうして213名の学生からのアンケート結果を見る限り、本を読んできていない学生、本が嫌いな学生にとっては、数値化というゲーム的な読み方はなかなか好評であることがわかる。文学作品を読むのに正統派の鑑賞の仕方は正しく、それ以外の読み方は好ましくないという従来の考え方にとどまらず、数値化するという文学とはおよそ対極にあるような読み方ではあるが、ゲーム感覚で読むというのも読み方の1つではないだろうか。どんな読み方でもそれがきっかけとなり、自分の好きな本を読み進んでいく方向へと導くことができれば、それも方法の1つであると考えている。本を読む楽しさを少しでも教えるために、今後も様々な試みをしていければと思っている。

#### 註

1. この中でPoeは、当時人気を博していたJames Fenimore Cooperの「革脚絆物語」('Leather-Stocking Tales,' 1823-41)を意識して、荒野物と海洋物は一般大衆を容易にひきつけられる2大題材だと述べている。しかし結果的には当時『ピム』は失敗した。
2. Ketterer, *New Worlds for Old*. 50.
3. *Philosophy of the Inductive Sciences*. OED: 1840 WHEWELL *Philos[ophy of] Induct[ive]* I, Introd. 113 We need very much a name to describe a cultivator of science in general. I should incline to call him a Scientist.
4. Levin, Harry. *The Power of Blackness*, 29. 「暗黒の力」とはメルヴィルがホーソーンに奉げた言葉。

#### 参考文献

- Aldiss, Brian. *Billion Year Spree: The History of Science Fiction*. London: Cavendish, 1975. 8.
- Beaver, Harold, ed. with intro. and commentary. *The Science Fiction of Edgar Allan Poe*. Harmondsworth: Penguin Books, 1976. vii-xxi.
- Botting, Fred. *Gothic*. London and New York: Routledge, 1996. 119-123.
- Cooper, James Fenimore. ed. with an historical introduction by Thomas and Marianne Philbrick *Wyandotté, or The Huttet Knoll*. New York: State University of New York Press,
- Crow, L. Charles. Ed. *American Gothic*. MA: Blackwell Publisher, 1999. 1-2, 71.
- Feidler, Aaron Leslie. *Love and Death in the American Novel*. 2<sup>nd</sup>. ed. London: Jonathan Cape, 1966.
- Goddu, Teresa A. *Gothic America*. New York: Columbia UP, 1997. 73-80.
- Hayes, Kevin J. "Introduction." *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe*. Ed. Kevin J. Hayes. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 4.
- Hogle, Jerrold E. "Introduction: the Gothic in western culture." *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*. Ed. Jerrold E. Hogle. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 1-20.
- Ketterer, David. *New Worlds for Old: The Apocalyptic Imagination, Science Fiction, and American Literature*. Bloomington: Indiana UP, 1974. 50.
- Levin, Harry. *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe, Melville*. London: Faber, 1958. 29.
- Lloyd-Smith, Alan. *American Gothic Fiction: An Introduction*. New York: Continuum, 2004.
- Lundblad, Jane. *Nathaniel Hawthorne and European Literary Tradition*. New York: Russell, 1965. 81-88.
- Poe, Edgar Allan. *Eureka. The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Ed. James A.

- Harrison. 1920 N.Y. edition. 17 vols. New York: AMS Press, 1965. XVI 179-315.
- , *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket. The Complete Works of Edgar Allan Poe.* Ed. James A. Harrison. 1920 N.Y. edition. 17 vols. New York: AMS Press, 1965. III 5-242.
- Savoy, Eric. and Robert K. Martin. "Introduction." *American Gothic: New Interventions in a National Narrative.* Eds. Robert K. Martin and Eric Savoy. Iowa City: U of Iowa P, 1998. vii-xii.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *The Coherence of Gothic Convention.* New York: Methuen, 1986.
- 巽 孝之「アメリカン・ゴシックの意識史」『アメリカン・ゴシック傑作選』別冊解説 アティーナ・プレス, 2005年。
- 八木敏雄『アメリカン・ゴシックの水脈』研究社, 1992年。
- 井上謙治編『アメリカ文学史入門』創元社, 1979年。
- 大橋吉之輔『アメリカ文学史入門』研究社出版, 1987年。
- 中村英一, 他4名『アメリカ文学史』英宝社, 1988年。
- 新村出編『広辞苑第5版』岩波書店, 1998, 2003年。
- 『世界大百科事典第2版』日立システムアンドサービス